様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３３９１２
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2018
課題番号：２５７７０１７０

研究課題名（和文）方言オノマトペの意味特徴と地理的分布との関連性についての調査研究

研究課題名（英文）Survey research on the relation between the semantic feature and geographical distribution of Japanese dialect ideophones

研究代表者
川崎　めぐみ（Kawasaki, Megumi）

名古屋学院大学・商学部・准教授

研究者番号：６０６４５８１０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：日本語の方言オノマトペについて、意味と地理的分布の関わりを明らかにした。多義的な方言オノマトペを取り上げ、それぞれの意味がどの地域で使われているかについて、全国277地点におけるアンケート調査を行った。調査結果をもとに言語地図を作成し、意味の分布を可視化した。その結果、方言オノマトペの意味の分布は、全国的に多数の地点で使用されるもの、全国的に少数地点で使用されているもの、使用地域に偏りがあるものが見られた。また、派生した意味は派生前の意味が存在している地域に見られること、海岸沿いや交易といった地理的あるいは文化的要因が使用の有無に関わっていることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
方言のオノマトペ（擬音語・擬態語）について、複数の意味を持つ多義的な語のそれぞれの意味・用法が、どのような地域で使われているのかを面的に示した初めての研究である。従来、語形の地理的分布、意味の点的報告があったが、それに対し、意味・用法の地理的な分布を言語地図として示したものである。言語地図を89点作成し、それ自体が今後の方言オノマトペ研究の基礎資料となる。また、意味の派生関係が使用地点を限定すること、文化的・地理的な要因（例えば海沿い、交易関係）がオノマトペの意味の伝播にも影響していることを具体的な形で明らかにした。

研究成果の概要（英文）：We clarified the relation between meaning and geographical distribution about Japanese dialect ideophones. We took up the ambiguous dialect ideophones and conducted a questionnaire survey at 277 locations nationwide on which region each meaning is used. We made a language map based on the survey results and visualized the distribution of meaning. As a result, the distribution of the meaning of alect ideophones was found to be used at many points throughout the country, used at a few points nationwide, and biased in the use area. In addition, it became clear that the derived meaning is found in the area where the meaning before derivation exists, and that geographical or cultural factors such as coastal area and trade are related to the use or non-use.

研究分野：方言学

キーワード：方言オノマトペ　地理的分布　多義語　面的分布　言語地図

１．研究開始当初の背景

オノマトペ（擬音語・擬態語）の地理的分布についての調査は、研究開始当初もいくつか見られた。まず、国立国語研究所による『日本言語地図』第 6 集の第 298 図「ほうほう（梟の鳴き声）―その１」、第 299 図「ほうほう（梟の鳴き声）―その２」、第 300 図「ちゅんちゅん（雀の鳴き声）」の言語地図がある。この言語地図では、梟と雀の鳴き声を表現する各地のオノマトペの語形の分布が明らかになっている。

論文等では、三井・井上（2007）は方言談話に現れるオノマトペを拾い上げ、全国的に見た地域差として、方言に独特なオノマトペの使用は周縁地域の一部に限られるとしている。さらに東日本の中でも東北地方でのオノマトペの使用頻度が高いことを指摘している。小林（2010）は、東日本、特に東北地方においてオノマトペが多用される一方、西日本ではオノマトペよりも一般語（オノマトペ以外の語）のほうが好まれるとした。また、小林はオノマトペによる表現を「状況をリアルに映し出すもの」とし、「東日本、特に東北地方は現場性の強い直接的な表現が好まれるのに対し、西日本は現場性の弱い間接的な表現が志向される」（44、45 頁）という東西日本の言語的な発想法の違いを示唆している。齋藤（2007）は、宮城県と高知県のオノマトペの使用状況を比較し、宮城県では高知県に比べて感情を表すオノマトペの語彙が発達しているとしている。このことから、オノマトペの意味や用法、あるいは意味の分野によって、オノマトペの使用される地域が異なってくる、すなわち語の分布に意味が影響を及ぼすのではないかという推論が立つ。

『日本言語地図』および(2)の小林（2010）は、語形の分布を示したものではあるが、三井・井上（2007）や齋藤（2007）の結果を合わせると、オノマトペの意味や用法が地理的分布に影響を与える可能性があった。ただし、オノマトペの意味といっても様々な要素が含まれる。清濁対立など音象徴的な意味が生きているものから、音象徴的な意味はあまり感じられないものまである。音象徴的意味をほとんど失い、一般的な語彙に近くなった「ゆっくり」などや、具体的な描写性を失った東北地方の「グイラ」「ボット」「ボッポリ」といった語群（グイラ・ボット系オノマトペ）すらある。グイラ・ボット系オノマトペについては、川越（2012）において陸羽東線地域の地理的分布の調査結果を述べた。グイラ・ボット系オノマトペは、具体的な描写性を残したオノマトペらしい語のほうが広い地域に分布するが、一方、具体的な描写性を失い、一般語に近づいている語は比較的狭い地域でしか用いられないという特徴が見られた。

以上のように、オノマトペの意味を地理的な分布と絡めて見ることで、オノマトペの全国的な分布がどのようになっているのかという点のみならず、オノマトペのどのような要素が地理的な分布に関わり、意味がオノマトペの地理的分布の形成にいかに関わっているのかということを明らかにする手がかりを得られることへの期待があった。

２．研究の目的

本研究の目的は、オノマトペの地理的な分布と意味がどのように関係しているのかを明らかにすることである。そこで語形について調査するのではなく、複数の意味を持つ多義的なオノマトペについて、その複数の意味がどのような地域に存在するのかを調査し、意味・用法の特徴と地理的な分布について考察していくことを目的とした。

従来、全国の方言のオノマトペに関しては、各地の方言集や『日本方言大辞典』（小学館）をはじめとする方言辞典、それらの一部をまとめた小野編『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』（2007，小学館）などにおいて、その使用される意味と用例が多数報告されている。その中には、「むたむた」のように複数の意味を有する多義的なオノマトペが存在する。小野編（2007）の記述によると、「むたむた」には、①猛然と勢いのよいさま（青森県、北海道）、②動作が緩慢なさま、むだでいい加減なさま（富山県、岐阜県）、③乱雑なさま（北陸地方）の３種類の意味・用法が示されており、①が東北・北海道、②③が北陸と、その意味で使用される地域が挙げられている。また、『日本方言大辞典』にも「むたむた」の項目があり、(1) むなしく過ごすさま（富山県）、(2) ぐずぐずするさま（岐阜県吉城郡）、(3) 乱れているさま（石川県）、(4) 猛然と。がむしゃらに（青森県津軽）、(5) いっしょうけんめいに。熱心に（青森県三戸郡）のように、やはり複数の意味・用法とそれぞれの使用地点が示されている。ただし、いずれも点的な情報にとどまっている。

このことを踏まえ、多義的なオノマトペについて、それぞれの意味がどの地域で行われているかを面的に示すことを目的とした。全国的な調査を行ない、その結果を言語地図化して、オノマトペの意味・用法の全国分布を示し、その上で意味とオノマトペの分布との関係について明らかにしていくことが目的である。

３．研究の方法

(1)　山形県寒河江市での面接調査を行ない、オノマトペの意味・用法について、特定の地域においてどの程度個人差が見られるのかを確認する。慣習的に用いられているオノマトペについては、その語の使用の可否については個人差があったものの、使用する際の用法に差はほとんど見られないことを確認した。ただし、それとは逆に、グイラ・ボット系オノマトペの用法には個人差が比較的大きく見られることも確認した。

(2)　山形県寒河江市での確認の後、オノマトペの意味・用法の全国的な分布を明らかにするため、「方言のオノマトペ（擬音語・擬態語）の意味と使い方に関する全国アンケート調査」を実施した。調査の詳細は次の①～④のとおりである。

①調査概要

調査時期　：　2015 年 12 月～3 月
対象地点　：　各都道府県の市町村のうち 5～10 地点、全国合計 500 の市町村
調査方法　：　通信調査（アンケート）
依頼方法　：　各市町村の教育委員会、担当部署を通して条件に該当する話者に依頼
依頼対象　：　60 歳以上の生え抜きで男女問わず
回収数　　：　277 地点分（回収率 55.4%）

②調査項目・回答方法

調査項目については、小野編（2007）『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』、『日本方言大辞典』（小学館）、『日本国語大辞典』（小学館）などに掲載されている方言のオノマトペのうち、多義的なもの、また複数の地域での使用があるものを任意で 15 語選定した。

そのうち語形と用例を提示して、その意味・用法で使用するか否かを「使用する／使用しない」で答えてもらう形をとった。なお、項目 15「ちんちん」については、辞書に掲載されている意味が多岐にわたり、多義というよりも同音異義のものが多く含まれているため、複数の意味を示し、使用する意味をすべて選択する形とした。また、項目 16「急に」「突然に」「いきなり」などの意味で使用されるオノマトペの項目は、特定の意味に対する語形が多種多様に出てくる可能性があるため、使用の可否ではなく、語形を提示し、使用できる語形を選択する形とした。

③調査対象語

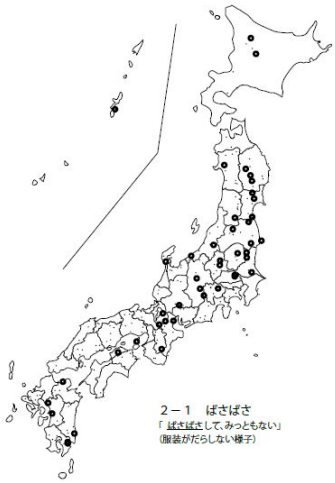
１.「わらわら」　意味用法 3 例
２.「ばさばさ」　意味用法 5 例
３.「ときとき」「ときんときん」　意味用法 5 例
４.「あふらあふら」　意味用法 3 例
５.「ぐずぐず」　意味用法 4 例
６.「きときと」　意味用法 5 例
７.「ぐらぐら」　意味用法 6 例
８.「ちゃがちゃが」「ちゃがはが」　意味用法 5 例
９.「どかどか」　意味用法 6 例
10.「とばとば」　意味用法 6 例
11.「はんなり」　意味用法 2 例
12.「ぺそっ」　意味用法 5 例
13.「ほっとり」　意味用法 6 例
14.「むたむた」　意味用法 6 例
15.「ちんちん」　意味ａ～ｋ（11 項目）
16.「急に」「突然に」「いきなり」などの意味で用いられるオノマトペ　意味用法 5 例

④地図化について

アンケート調査の結果は、地図化ツールを使用して.svg ファイル形式の言語地図を作成した。項目 1～15 については各図、その意味・用法を「使用する」との回答があった地点を「○」、「使用しない」との回答の地点を「・」で示した。項目 16（グイラ・ボット系オノマトペ）については、語形ごとに記号を割り振って示した。項目 16 は語形が多いため、簡易版と詳細版を作成した。併用語形が多いため、簡易版では最初の語音をもとに「系」としてまとめて１つの記号を当てた。結果、項目 16 の簡易版、詳細版を含め、全体で 89 点の言語地図ができあがった。

４．研究成果

(1) 全国アンケート調査をもとに言語地図を作成したことで、オノマトペの地理的分布の特徴が明らかになった。項目 1～14 のオノマトペの意味・用法の地理的分布には、①全国に広くまんべんなく分布するもの、②広範囲にまばらに点在するもの、③使用地域のまとまり（偏り）が見られるものの３種類が見られた。



(2) 全国的に広くまんべんなく分布するもの―「ばさばさ」（項目番号 2）

2-1. 服装がだらしない様子
「ばさばさして、みっともない」

2-2. 乾いたものが触れ合う音
「ばさばさと鳥の羽音がした」

2-3. 乾いて乱れた様子
「髪の毛がばさばさになってしまった」

2-2、2-3 が共通語の用法、2-1 が方言の用法である。2-2、2-3 は全国にまんべんなく分布しているが、方言の 2-1 の用法もまた、地点数は少ないものの、中国・四国地方を除き全国的に広く分布している。

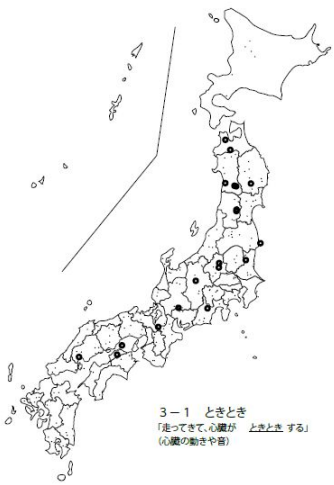
(3) 広範囲にまばらに点在するもの―「ときとき」（項目番号 3）

3-1. 心臓の動きや音
「走ってきて、心臓がときときする」

3-2. 落ち着かない様子
「ときときと慌てて外へ出ていった」

3-3. 落ち着かない様子
「ときときとしていないで、まず座りなさい」

項目 3「ときとき」は、現代共通語としては一般的ではない方言のオノマトペであり、広くまばらに使用地点が見られるものである。各県の主要都市ではない地点での使用が目立つ。3-1 の心臓の動きや音という比較的「類像性（iconicity）」の強い意味・用法のほうが使用地点は多く、抽象度が高い 3-3 の「落ち着かない様子」の用法のほうが使用地点は少なくなっている。抽象度が高く類像性が弱いほうの使用地点が多いという点は、グイラ・ボット系と同じ傾向であり、オノマトペの地理的分布の特徴の一つと言える。



(4) 使用地域のまとまり（偏り）が見られるもの―「きときと」（項目番号 6）

「きときと」は富山県のオノマトペとして、6-1「魚が新鮮であること」という意味で使用されるものが有名である。自然な使用というよりも観光 PR などに使用されることも多い。この「きときと」は太平洋側の海沿い、秋田県南部にも見られる。海沿いに見られる使用は、魚に関わるものであるため、その地域で定着したものと考えられる。秋田県の南部の使用は、日本海側の交易による伝播の可能性が高い。一方、6-4 の「目が輝いている様子」という意味は、魚の新鮮さと「光る」という点で通じている。注目すべきは、富山県以外では、太平洋側の使用地点がなく、東北の一部に使用が見られることである。太平洋側の使用は魚に限定されたものであり、意味が限られている。魚を扱う地域において、富山県で有名になった魚の「きときと」が、その用法に

限って定着した可能性がある。一方、東北地方は富山と直接交渉があったために、魚以外の用法も伝播し、それが見られるという結果が出たという推測ができる。

(5) グイラ・ボット系オノマトペ（項目番号 16）

「急に」を表すオノマトペの語群、「グイラ」や「ボット」などは東北地方に多く見られていた。いずれの語形も、動きが急であることを表す。グイラ・ボット系オノマトペの使い方について、話者のタイプは 4 つに分かれる。1 つの語を場面に関係なく「急に」の意味で用いるタイプ、特定の複数の語を場面に関係なく「急に」の意味で用いるタイプ、場面と語が 1 対 1 で対応しており使い分けるタイプ、1 つの場面に対して複数の語が対応しており場面によって使い分けるタイプである。

調査の結果、16-1 の地図のように、東北地方に多彩な語形が見られ、1 つの場面に複数の語形が対応しているのがわかる。東北地方には、場面-複数語という対応関係の使用をする話者が東北地方には多い。一方、西日本にもグイラ・ボット系オノマトペが見られるが、こちらは単独語の回答の地点が多く、東北地方ほど多彩な回答は見られない。1 場面 1 語の使用が中心となっている。

(6) この調査結果は、報告書『方言オノマトペの意味・用法に関する言語地図』としてまとめた。この報告書は、「方言のオノマトペ（擬音語・擬態語）の意味と使い方に関する全国アンケート調査」の結果を 89 点の言語地図にまとめ、また話者からの自由記述についても記載したもので、今後の方言オノマトペ研究の基礎的な資料の一つとなることが期待される。

〈引用文献〉

①小野正弘編（2007）『擬音語・擬態語 4500 日本語オノマトペ辞典』小学館
②川越めぐみ（2012）『東北方言オノマトペの形態と意味』東北大学博士学位論文
③小林隆（2010）「オノマトペの地域差と歴史 ―「大声で泣く様子」について―」小林隆・篠崎晃一編『方言の発見』ひつじ書房
④齋藤ゆい（2007）「方言オノマトペの共通性と独自性－宮城県旧小牛田町と高知県安芸郡奈半利町との比較－」『高知大国文』38
⑤三井はるみ・井上文子（2007）「第２章 方言データベースの作成と利用」小林隆編『シリーズ方言学 4 方言学の技法』岩波書店

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計０件）

〔学会発表〕（計１件）

① 川﨑めぐみ、多義的オノマトペの意味・用法に関する全国分布調査結果の考察、日本方言研究会第 107 回研究発表会、2018

〔図書〕（計１件）

①　小林　隆、川﨑めぐみ　他、ひつじ書房、方言学の未来をひらく　オノマトペ・感動詞・談話・言語行動、2017、11-86

〔産業財産権〕
○出願状況（計０件）

○取得状況（計０件）

〔その他〕
なし

６．研究組織

(1)研究分担者
研究分担者氏名：
ローマ字氏名：
所属研究機関名：
部局名：
職名：
研究者番号（8 桁）：

(2)研究協力者
研究協力者氏名：
ローマ字氏名：

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。